校長室だより

R5.10.3　Vol.20

雑談

○　「校長先生！百円拾いました！」「あ～昨日落としたんよ！」「え？ほんとですかぁ？」「ごめん…うそ…もう、もらっちゃったら？(悪魔の囁き)」「そんなことしません！」「さすが６年生！えらい！」

○　「校長先生！お母さんあるある！聞いてください！」「なになに？」「お母さんの口癖です！『うちはうち！よそはよそ！』」「あっそれ…校長先生が小さい時も同じこと言われてた…。大人っていいよね～。」「ですよね～。」『そんな大人にいつの間にかなっている自分…』歴史は繰り返します。あ！そう言えばお年玉、貯金しとくねと言われて毎年、母に預けていました。そろそろ返してほしいなあ（笑）

秋桜（コスモス）

秋桜があちらこちらで揺れる季節になりましたね。子供に「あそこに咲いている花、何か知ってる？」と聞くと、３年の男の子だったでしょうか。「秋桜！」と即答。「よく知ってるね。」と言うとまんざらでもない顔。(可愛い！)

実はこの読み方、シンガーソングライター(死語？)のさだまさしさんが言い始めたものだと知っていましたか？それが今や、漢字変換すると一発で出てくるほど一般化しています。

「秋桜」といえば、さださんが作った歌が頭をよぎります。「♪薄紅の秋桜が秋の日の～♪」いい歌ですよね。何ていうんでしょう。日本の原風景というか、親子の情というか、母親の無償の愛というか、お互いを慈しむ心というか、そんな何かが歌から溢れてくるんですよね。

秋は自然からいろいろな変化を感じ取れる季節でもあります。自然豊かな石城地区！五感を研ぎ澄まし、感じた何かから想像を巡らせる。そんな時間もあったらいいなと思います。

四方山話令和5年度 ver.　其の二十(知覧からの手紙)

前号で戦争について触れました。もう少しだけ…。婚約者の女性に最後の手紙を残した方のことが妙に気になり、調べてみました。穴沢利夫さんという方でした。右の写真をご存じですか？特別攻撃隊として片道だけの燃料と250キロの爆弾を飛行機に積み、飛び立っていく隊員を女学生が見送っています。この女学生たちは、戦後、なでしこ隊と呼ばれるようになりました。出撃までの数日間、隊員の身の回りのお世話をしていたそうです。その方たちが桜の花を持って、まさに出撃しようとする飛行機を見送っている写真です。どんな思いで見送っているのか、どんな思いで飛び立とうとしているのかと、この写真を見るたびに考えていました。調べていくと、この飛行機の操縦桿を握っている方が穴沢さんだとわかりました。婚約者であった方は智恵子さんといい、2013 年までご存命でした。語り部として残されていた記録を見つけました。「知覧からの手紙」という一冊の本になっています。急いで取り寄せ、ページをめくると、一気に読み終えていました。詳細は割愛しますが、穴沢少尉が残した手紙をぜひ読んでほしいです。死を目前にした人が、そして 23 歳の青年が書いた内容とは到底思えません。最後の部分を紹介します。**『今更何を言うか、と自分でも考えるが、ちょっぴり欲を言ってみたい。一、読みたい本「万葉」「句集」「道程」「一点鐘」「故郷」　二、観たい画ラファエル「聖母子像」　芳崖「悲母観音」　三、智恵子　会いたい、話したい、無性に…　今後は明るく朗らかに。自分も負けずに、朗らかに笑って征く』**

今、「なでしこ」と聞いて「なでしこ隊」と「なでしこジャパン」どちらを想像する人が多いでしょうか？教科書に「特別攻撃隊」の文字は記載されていません。今回、私はセンターにある御遺影を見たことから、この本にたどり着きました。この本が歴史のまた違う側面を私に教えてくれました。動画視聴やゲームに明け暮れるのではなく、じっくり本に向き合う時間、子供たちにも大切にしてほしいなと思います。読書の秋です。